カサゴ

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カサゴ

【Ｎコード】
Ｎ４３９５Ｊ

【作者名】
栗原峰幸

【あらすじ】
うつ病で精神病院に入院している神崎功一の前に、野原こずえという元ＡＶ女優が入院してくる。意気投合し、やがて恋仲となる二人だが、果たして恋の行方はどうなるか？

閉鎖病棟

神崎功一はただぼんやりと眺めていた。揺らめきながら霞んでゆく、一筋の煙を。その先にあるのは、蓄積されたヤニだ。

功一の瞳は虚ろだった。煙を追うでもなく、宙を泳いでいる。それに彼の居る空間の狭さと言ったらどうだ。古ぼけたテーブルを囲むように、無機質な丸いすが三つ。テーブルの上には水を張った灰皿。そして、そこを囲う空気の淀みようは、まるで夏のアオコの浮いた沼を連想させる。

功一はおもむろに煙草を吸った。灼熱の火が真っ赤に燃え上がる様は、そこだけ生命感を強調させていた。そしてまた、吐き出される紫の帯。時間さえも淀んでしまいそうだった。

「バタン！」

安普請の扉が開き、そして閉まった。誰かがこの小部屋に入ってきたのだ。

「はじめまして。こんにちは」

入ってくるなり挨拶をしてきたのは、二十歳そこそこの女であった。化粧こそしていないものの、ミニスカートに臍だしルックと、男にとって目のやり場に困る出で立ちをしているではないか。そして、大きな瞳に、通った鼻筋、少し厚めで色気のある唇と、顔立ちは美しかった。ここのところ心の動くことがない功一だが、その時は確かにそう思った。

「ああ、こんにちは」

功一は愛想よく、笑顔で答えた。先ほどまで無表情だった顔の筋肉が緩む。

「私、今日入院してきたの。精神病院なんて始めてだからわからないことも多くて。良かったら、いろいろ教えてくれない？」

女は功一の隣に座ると、細身のメンソール煙草を取り出し、机に括り付けられたライターで火を点けた。女が「ふーっ」と煙を吐く。

二つの煙がもつれ合うように、天井へと伸びていく。こうして天井のヤニは蓄積されていくのだ。
「教えて欲しいって、何を？」
功一は女がそのような格好をしているのも関わらず、好奇の目を向けなかった。あれだけ虚ろだった瞳が、むしろ優しさを湛えているではないか。
「ほら、食事の時にお茶を汲む順番とか、いろいろオキテみたいなもの、やっぱあるんでしょ。ここでも？」
「ああ、そういうことか……。確かにあるよ、そういうの」
「やっぱりねぇ……。先生はゆっくり静養しなさいって言ったのに……」
女はつまらなそうに煙を吐く。
「ここだって閉鎖的な世界さ。力関係が微妙な均衡を保っている感じだもん。ところで、あんたは格好といい、病気には見えないけどなぁ」
すると女は左手のリストバンドを外した。そこにあるのは蚯蚓腫れのリストカットの跡だった。
「私、これでもうつ病なのよ」
「じゃあ、仲間だ」
功一が屈託のない笑顔を浮かべて、右手を差し出した。その仕草がどこかの居酒屋に居る酔っ払いのようでもあった。女も微笑を浮かべて右手を差し伸べる。
「私、野原こずえ。アダルトビデオのお仕事をしていたの」
「アダルトビデオ？」
功一が丸いすからずり落ちそうな勢いで驚愕した。
「何、驚いているのよ。そんなに珍しい、ＡＶ女優が？」
「いや、俺もアダルトビデオにはお世話になったことはあるけどさぁ。まさか、その……」
功一の顔が見る見るうちに赤面し、しどろもどろになる。
「あんた今、心の中で、私の服を脱がせてるでしょ？」

「え、あ、はい……」
「正直でよろしい」
こずえが「ぷっ」と笑った。功一は思わずむせ込む。功一にしてみれば、心の内側の鍵をちょいと悪戯された印象だった。だが、こずえは微笑を絶やさない。
「ところで、あなたのお名前は？」
「僕は神崎功一。しがない公務員さ」
「お役人なの？」
「僕は下っ端でね。いつも庁舎の修繕とかさせられているから、工務店の公務員」
「あはははは……、面白い人。そんな面白い人がなんでうつ病なんかになるわけ？」
「ただでさえ忙しい部署なのに、市議会が始まると、議員のセンセイ方が質問を用意するんだ。その回答作りに毎晩残業さ。一週間に五十時間以上は残業してたな。家に帰るのは日付が変わってからさ」
功一が宙を見上げ、目を細めた。
「お役人って、定時になったら帰れるもんだと思ってた」
「確かにそういう部署もあるけどね。現実は楽じゃないよ。お陰で入院して二ヶ月になるもん」
功一は二本目の煙草に火を点けていた。こずえも一本目を吸い終え、二本目の煙草を取り出す。そこへ功一がすかさずライターを翳した。
「ありがとう。商売ヌキでこんなことしてくれるなんて、優しいんだ」
「そんなつもりじゃないよ。今や嫌煙ブームだからさ、お仲間同士じゃないか」
そう言う功一の瞳は、やはり優しい。ややもすると、気後れするくらいの優しさを湛えている。
「ねえ、これから荷物の片付けとか済ましてくるから、夕食前くらいにゆっくりお話をしない？」

「いいよ」
こずえは吸いかけの煙草を灰皿の中の水に放ると、振り向き様に手を振り、扉の向こうに消えていった。扉の閉まる音が先ほどとは違い、功一には無骨な音に感じなかった。

神崎功一は今年で二十八歳になる。神奈川県下の、とある市に勤務する地方公務員だ。先ほど、彼が述べたように、一週間に五十時間を超えるハードな残業をこなしていた。

それは突然訪れたかのようにも見えた。会議の直前になり、目がグルグル回るのだ。嫌な脂汗が額、掌、いや全身から滲み、心臓の鼓動が鼓膜を直接刺激した。それは動悸となり、口から心臓が飛び出そうになるほどだった。

その日、功一は市役所を早退し、かかりつけの内科に受診したが、どこも異常は認められなかったのだ。だが、馴染みの医師は疑って言った。

「もしかしたら、心の病かもしれませんよ」

考えてみれば、こうなる半年の間、ロクに眠れていなかった。寝つきが悪く、寝汗をかきながら早朝に目が覚めるのだ。そして、決まって見る、追いまくられるような嫌な夢。

そんなだから当然、昼間は脳の活動も著しく低下し、仕事の能率は悪かった。ただでさえ厳しい上司に叱責される回数は増え、職場で過ごす時間が苦痛になっていたのも事実である。

内科医に紹介されたのが、秦野市内にある精神病院だった。比較的大きな病院で、入院設備も整っている。門構えも立派だった。

功一は紹介状をもらっても、すぐに受診するのを躊躇った。ただでさえ精神科への受診は敷居が高い。加えて、その病院は地元でも有名な病院で、秦野市出身の功一としては、近所で噂が立つことも気になったであろう。しかしそれ以上に、親の落胆する顔が浮んだのだ。

功一が公務員になったことを一番喜んだのは両親であった。父親

は不安定な建築業をしていた関係もあり、子どもには食いはぐれのない職に就かせたいという想いが強かった。そんな息子が精神病院に罹り、近所でも噂になったら、親はさぞ嘆き悲しむだろうと功一は思ったのだ。

だが、実際に電話してみると、父親の答えは呆気なかった。

「早くその病院へ行け」

功一は父親のその言葉に後押しをされるように受診した結果、うつ病と診断され、即入院となったのだ。大学にストレートで合格し、公務員になったという経歴の持ち主の功一である。それまで順風満帆だった功一の人生はここで暗礁に乗り上げた。少なくともその時、功一にはそう感じられたのだ。

功一は入院してから「閉鎖病棟」と呼ばれる、自由に出入りが出来ない病棟に籍を置くことになった。主治医の説明ではゆっくり静養するために、外部の刺激を遮断するのだとか。それでも、まるで防弾ガラスのような扉の鍵が音を立てて閉まる時、功一は世間と隔絶された感覚を覚えたものだった。

入院から二ヶ月。寝ては起きての生活の繰り返しだった。特に外科のように手術痕が癒されるわけではない。内科のように内臓の検査数値が良くなるわけでもない。一週間に一回ある主治医との面接では当たり障りのない話。果たして本当にうつ病が良くなっているのかどうか、功一にも実感できないまま二ヶ月が過ぎていった。

主治医は薬物療法と静養がうつ病には大切と言っていたが、病棟は心底静養できる環境ではないと功一は思っていた。看護師の目の行き届かないところで、患者同士の小さなトラブルは頻発していたし、牢名主のような患者は常に悪態をつく。力関係のヒエラルヒーは社会の縮図のようにも思えるが、アウトローの集団にも思える。何とも気の置けない集団だった。だから功一は食事と喫煙以外は、なるべく病室で過ごすようにしていた。

ただ、毎日することがないというのは、発狂しそうなほど気の遠くなる時間だった。かと言って、プログラムに参加して人と接する

のも煩わしかった。この時、功一は時間で満腹であった。そのことを主治医に告げても「そのくらいで丁度いいんですよ」と返されるのが、ここのところ不満に思ったりもしている功一であった。

功一が夕食の時間より早めに食堂に出てくることは珍しい。それも、こずえとの約束があるからだ。だが、功一が食堂に出てきた時には、既にこずえの周囲には野獣のような瞳をぎらつかせた男性患者たちが取り巻いていた。その中には牢名主のような患者もいる。

取り敢えず、功一は少し離れた席に着き、新聞を広げた。新聞は毎日、病棟に届くのだ。特に新聞を読みたかったわけではない。耳はこずえとそれを取り巻く男性患者たちに向けられている。

するとどうだろう。そこに咲いていたのは猥褻談義だった。こずえはアダルトビデオに出演していたことを吹聴しているではないか。それに男性患者たちが食い入るように聞き入り、質問をしている。聞けば赤面するような話をこずえは堂々とし、男性患者からは歓声が上がる。

功一は軽く咳払いをした。それに気付いたのか、こずえがチラッと功一の方を見た。だが、既に男性患者たちの勢いは留まることを知らず、次から次へとアダルトビデオの撮影現場のことなどで質問攻めにする。

功一は新聞の陰からこずえの表情を見た。それは何とも活き活きとしているではないか。

「昔取った杵柄、か……」

功一が唸るようにつぶやいた。そのこずえの気持ちがわからなくもない功一であった。現在の部署に人事異動になる前には、第一線で仕事をこなし、上司からの信頼も厚かった。それなりに仕事をこなしていたプライドもあった。そんなプライドと同じように、今のこずえにはアダルトビデオに出演していたことが誇りなのかもしれないと功一は思う。このような環境に置かれて尚、アイデンティティーを保つにはその話をするよりほかにないのだろう。

だが、功一の心の中は釈然としない。この時間の先約は彼にあるのだ。功一は恨めしそうな目で男性患者たちを見つめた。
すると、それに気付いたこずえが立ち上がった。
「はい、もうアダルトビデオの話はお仕舞い」
そして、功一の方へと歩み寄る。
「ごめんね、お待たせ。一緒に煙草吸う？」
「ああ……」
功一とこずえは連れ立って喫煙室へと向かった。その後を二人の男性患者が付いて来て、一緒に喫煙室に入った。だが、功一とこずえは気にせず話し始めた。功一はこずえの煙草にライターで火を点けてやった。
「ごめんね。気にしてる？」
「いや、別に……。でもあまり刺激的な話は避けた方がいいんじゃないかな。そうは言っても、ここは精神病院なんだぜ。心のバランスを崩す奴がいないとも限らない」
功一は責めるふうでもなく、さらっと言って退けた。こずえは口を「へ」の字に曲げて困惑したような表情をし、頭を掻いた。
「私が私らしくいられる時って、ああいう話をしている時なのよね」
「わかるよ、その気持ち……」
「ああ、ダメね。決別したつもりなのに。アダルトビデオのせいで病気になったんじゃない」
こずえが頭を抱えた。左手のリストバンドが痛々しい。
「親御さんにアダルトビデオのことは？」
「当然バレたわよ。そうしたら、お前は狂ってるって言われてね。まあ、うつ病になっていたんだけどね」
「やっぱり辛いの、あの仕事？」
功一が心配そうな顔をしてこずえの顔を覗き込む。
「うーん、仕事自体は楽しいかな。そりゃ、楽しくなきゃ、やってられないわよ。でもやっぱ虚しいのよね」
こずえがため息まじりに煙を吐き出した。一緒に入ってきた二人

の男性患者は煙草を吸うわけでもなく、ただ突っ立っている。その二人のこずえを舐め回すような視線と言ったらどうだ。煙がその二人の方へ流れた。
「そうか、虚しいか……」
「でも、あなたはいいわよね。市民のために働いているんだもの。やり甲斐もあるでしょう？」
「そんな格好いいもんじゃないぜ。結構、一般常識とズレていることがまかり通るのがお役人の世界なんだなぁ……。数字ですべて片付けられちゃう感じ」
この時、功一は笑っていた。功一は自分でも不思議に思う。入院して以来、笑ったことなど果たしてあるのだろうかと。しかも、仕事の話をしながら笑う自分に驚いていた。
（もしかしたら、俺のうつ病は良くなっているのかもしれない……）
そんなことをこずえとの会話で実感していた。もし、それが本当だとしたら、その引き出しを提供してくれたこずえに、感謝しなければならないと功一は思った。
「もっと、エッチな話をしてくれよ！」
一緒に喫煙室に入ってきた男性患者の一人が痺れを切らせ、こずえに叫んだ。だが、こずえはその男性患者を一瞥し、言い放った。
「私はこの人と今、話をしているの。もう、エッチな話はお仕舞いよ！」
それでも二人の男性患者は喫煙室から立ち去ろうとしなかった。功一は知っていた。この二人は煙草を持っていないことを。喫煙本数が制限され、夕方には煙草がなくなってしまうのだ。だから、煙草を他の患者にねだったりして、よくトラブルを起こしていた。喫煙室には喫煙しない者の入室は禁じられている。
功一はテーブルの灰皿に目を遣った。吸殻が山のようになっている。功一は喫煙室の扉を開けると、廊下にいた看護師を呼んだ。
「すみません、灰皿の吸殻を捨ててもらえますか？」
「はい」

ここは精神病院だ。看護師の多くは男性である。喫煙室に無意味に突っ立っている二人の男性患者がこの看護師に引きずり出されるのに時間はかからなかった。実際、この看護師の「煙草を吸わない人は外に出る」の一言で、二人は呆気なく退散してしまった。

「ふふふ、あんたもなかなかやるじゃない……」

こずえが悪戯っぽい微笑みを浮かべた。

「やっぱり、あんたはうつ病に見えないな」

功一が笑いながら言った。しかし、その目はこずえのリストバンドへと向いている。

「うつはうつ。でも、そんなに重症じゃないのかもね。実は親にアダルトビデオへの出演がバレて、無理矢理入院させられたのよ」

「そうか……。でも、そんなことで入院させられるもんなのかなぁ……」

功一は親の都合などで、娘を勝手に入院させられるものかと思う。だが、現実にこずえは入院しているのだ。

「あー、なんか、あんたと話してるとホッとするわ。すごい楽」

こずえの目尻が下がった。いや、目尻だけではない、肩も幾分下がったか。

「いや、俺もここへ来て人と話したのなんか久しぶりだよ。ところでどこに住んでいるの？」

「厚木よ。今は実家にいるの」

「へえー、奇遇だな。俺も厚木で一人暮らししているんだ。まあ、実家は秦野だけどね」

会話が自然だった。既に二人とも二本目の煙草に火を点けようとしていた。

そんな功一とこずえの出会いから二週間ほどが過ぎた。二人は喫煙仲間としてよく会話をするようになり、いつしか「功一」、「こずえ」と呼び合うまでに距離は縮まっていた。功一は喫煙室以外にもよく出ては喋るようになったし、こずえもよく食堂に出てきてい

た。ただ、こずえのミニスカートは相変わらずで、病院に相応しい格好とは功一には思えなかった。男性患者を取り巻いての猥褻談義も時々聞かれた。だからと言って、こずえの趣味に口を挟む権利がないことは、重々承知している功一であった。ただ、不思議なことにこずえは、功一に対しては猥褻な話を振ることがなかった。

その日もこずえはミニスカートに臍だしルックと、刺激的な格好をしていた。本人にしてみればお洒落のつもりなのだろうが、男性患者たちの絡みつくような視線は避けられない。また、その格好で猥褻談義を醸すものだから、刺激にならないわけがなかった。

こずえが男性患者数人と猥褻談義を終えて、食堂の席から立ち上がった時だった。

「うおおおおーっ！」

雄たけびを上げた初老の男性患者が、こずえに向かって突進してきたのだった。

「きゃーっ！」

「ヤらせろよーっ！」

精神のバランスを崩した初老の男は、漲る力でこずえを押し倒し、その衣服を引き裂こうとしていた。

「やめろーっ！」

看護師より早く初老の男に組み付いたのは功一であった。だが、年寄りと侮ることなかれ、人間こういうときには力が出るものである。功一が引き剥がそうとしても、初老の男はビクともしなかった。それでも功一は、男の腕をこずえから離そうと、渾身の力を込める。次の瞬間、初老の男の力が緩んだような気がした。すると、功一の腕は振り解かれ、思い切り、顔面に肘鉄を食らわされたのだ。

「ぐうっ！」

それでも功一は男の腕を掴みなおした。功一は一瞬考えた。今まで模範患者のように過ごしてきたが、ここでトラブルを起こすと退院が延びるかもしれないと。だが、目の前でこずえが乱暴されているのを、見て見ぬ振りはできなかった。

ようやく看護師が三人、騒ぎに気付き、やってきた。誰も屈強そうな男性看護師である。
「はいはい、離れて、離れて！」
看護師たちは初老の男を無理矢理引き剥がす。ある者は頭を抑え、ある者は腕を捻り、ある者は足を締め付けた。さすがに初老の男も男性看護師三人を相手には屈せざるを得なかった。初老の男は看護師長が持ってきた拘束衣を着せられ、まるで独房のような保護室の向こうへと消えていった。
功一は洗面所でうがいをした。すると、口の中は切れ、血が吐き出された。鉄の味が不快だ。功一は鏡に映る自分の顔を恨めしそうに睨む。その顔が情けなかった。功一にはそう思えた。
廊下からは看護師長の甲高いヒステリックな声が聞こえていた。看護師長は年配の女性なのだ。
「あんたもね、ミニスカート穿いてお臍なんか出してるんじゃないわよ。ここは病院なのよ！」
功一は恐る恐る廊下に出た。すると、看護師長の前で頭を項垂れているこずえがいた。服は半分引き裂かれ、ピンクのブラジャーが露わになっていた。その姿に功一は一瞬ドキリとしたが、それ以上にこずえが哀れで仕方なかった。だが、看護師長の怒りは収まらない。
「それにあんた、猥褻な話をよくしてるでしょう。困るのよね、変に刺激されちゃ。また、今度みたいなことになったって責任持てませんからね」
功一はその横をすり抜け、自分の病室へと戻った。その際に、チラッとこずえの方を見たが、こずえは項垂れたままだった。
功一の病室は個室である。あまり広い部屋ではなかったが、差額ベッド代は加入している入院保険で賄えた。
廊下の喧騒がひと段落した頃、功一の病室の扉をノックする者があった。
「はい、どうぞ」

しかし、返事がない。不審に思い、功一が扉を開けてみるとそこに立っていたのは、紺のワンピースに着替えたこずえだった。功一が扉を開けるなり、こずえは病室に入ってきた。本来、他人の病室に入ることは固く禁じられている。

「ごめんなさい、私……」

そう言いかけて、こずえが功一の胸に飛び込んできた。その肩は震えている。

功一はそっと、そっと両手をこずえの背中に回した。力は入れずに、優しく抱きしめてやる。

「怖かった……。でも、すぐに功一が来てくれたのが嬉しかった……」

こずえの肩はまだ震えている。おそらくは、まだ恐怖が抜けないのであろう。そして、功一に抱きしめられている安堵感も同時に去来しているはずだった。

「俺も肘鉄食らっちゃったよ」

「大丈夫？」

こずえが顔を上げた。二人が瞳を閉じた。そして、唇と唇が重なった。

それはまことしめやかな接吻だった。重なった唇が余計な動きをするわけではなく、ただ時間の流れが止まっていた。二人の唇と唇が離れたのは、どれくらい経ってからだろうか。

「へへ、功一の唇、奪っちゃったね……」

こずえが照れくさそうに呟いた。

「この感触、ずっと忘れないでいるよ」

功一が今度は力いっぱいこずえを抱きしめた。こずえはすべての体重を功一に預けていた。

その日の夕方であった。功一は主治医との面接で、退院を勧められた。

「十分、静養したでしょう。後は自宅療養で通院すればよいと思い

ますよ」
　それが主治医の見解だった。功一としてみれば、もう少し入院してこずえとの時間を作りたかった。しかし、こずえだっていつまで入院しているかわからない。これまでの二ヶ月を思えば、主治医が勧める時期に退院するのが得策に思えた。
「わかりました」
　功一は主治医の意見に素直に従った。
「神崎さんはお一人暮らしでしたね。確か実家がこの秦野市内だとか」
「ええ」
「ならば、しばらくは実家で静養することをお勧めしますよ。一人暮らしだと、調子の悪い時に誰も助けてくれる人がいませんからね」
「はあ」
　功一もそれはなるほどと思う。うつがひどくなって、動けない時は本当に動けないのだ。ましてや一人暮らしで食事、洗濯、掃除などの家事全般をこなすのには、まだ正直なところ、自信がなかった。
「そうですね。検討します」
　笑いながら功一は答えた。功一は知っている。「検討する」とは公務員が相手に期待を持たせて、ばっさり切り捨てる時の常套句なのだ。だがこの時ばかりは、本当に実家に身を寄せようと思っている功一であった。
　功一は真っ先に退院の報告をこずえにした。
「ウソーッ、もう退院なの？」
　こずえは驚きを隠せず、手で口を覆った。そして、すぐ動揺の色が浮ぶ。
「なあ、メルアドと番号、交換しようよ」
　こずえとは携帯電話の番号とメールアドレスを交換し、こずえが退院したら連絡をもらうことにした。こずえは最初、功一の退院に動揺していたが、それでも「おめでとう」と言ってくれた。そういう功一もこずえのことが心配でないわけではなかった。今日のよう

な事件があっては尚更である。
翌日、不安を拭いきれないこずえの視線に見送られて、功一は退院した。病院の玄関を出ると真夏の太陽が容赦なく功一を照らしつけた。病院の中は程よく空調が効いていて、季節は感じられなかったのである。
（そう言えば、今は夏なんだっけな……）
功一はボストンバッグで身体を庇うようにして、最寄り駅まで駆け出した。全身から汗がジワリと滲み出るのがわかった。

釣りの哲学

功一は厚木市内のアパートで一人暮らしをしていたが、主治医の勧めもあり、一旦は秦野市の実家に身を寄せることにした。今は弟の信二も家を出ており、実家は両親の二人暮しである。功一の実家は秦野市の曽屋というところにある。国道２４６号線の近くで、駅からは少し離れた閑静な住宅街だ。

功一はアパートを片付け、必要最小限の荷物を持って自家用車で実家に向かった。自家用車と言っても小豆色の軽自動車である。秦野に向かう途中、国道２４６号線は渋滞していた。ちょうど伊勢原を過ぎた辺りから渋滞が始まり、秦野に入る手前まで車は時速十キロ程度でしか走行しなかった。それでも新善波トンネルを抜けると、真正面に大きな富士山が功一の目の中に入ってきた。それは夏の雲を従えながら雄大に映え、見る者を圧倒するだけの迫力があった。

（富士山はやっぱり日本を代表する山だな……）

功一はそんなことを思ったりもした。

新善波トンネルを抜けると、渋滞もいくらか緩和され、下り坂に入る。実家はもうすぐだった。

そのまま国道を走れば実家に着くのだが、小腹の空いた功一は、ちょっと寄り道をして小田急線を挟んで反対側にある「三憩園」というラーメン屋に寄った。「三憩園」は湯河原の老舗「味の大西」の味を継承する店で、功一はここのラーメンが好みだった。

カンスイの入っていない麺はすぐ茹で上がる。注文して間もなく、功一の目の前に美味しそうな湯気を上げたラーメンが運ばれてきた。功一は胡椒を軽く振ると、すぐさま麺を啜った。そして、「美味い」と唸ったものである。入院時、何故か味噌汁などの汁物が出なかった。無論、ラーメンなど久しぶりだ。だからこそ、ラーメンを心行くまで堪能したかった功一である。麺を啜りながら功一は、いずれここのラーメンをこずえと二人で食べたいと思っていた。

満腹で「三憩園」を後にした功一は、満たされた気分で実家を目指した。

実家では両親が功一の帰りを待っていた。小豆色の軽自動車が敷地内に滑り込むと、両親が駆け寄ってきた。

「お帰り」

母の律子が心配そうな顔で、覗き込む。

「ごめんよ、父さん、母さん、心配掛けて。しばらくの間、厄介になります」

「馬鹿か、ここはお前の家だぞ。誰に気を遣うんだ。まあ、ゆっくりしていきなさい」

父の鉄夫が笑った。それを見て、功一は荷物を後部座席から降ろし始めた。

実家は昔と変わりなかった。昔、功一が使っていた部屋には勉強机や教科書、百科事典などがそのまま置かれていた。功一はしみじみとかつて使っていた机を眺めた。

「功一、父さんが呼んでいるわよ」

律子のその声で、功一は居間へと足を運んだ。

居間では鉄夫がビールを片手に待ち構えていた。息子との再会を祝して乾杯をしようという心積もりだ。

「父さん、俺は今、病気なんだよ」

「酒、ダメなのか？」

「基本的にはね。まあ、一杯くらいなら……」

「そうか、じゃあ飲め」

功一が恭しくグラスを差し出した。金色の泡が注がれる。功一は先ほどラーメンを食べていたから、空腹ではなかった。それでも久々に眺める黄金の液体は美味そうに感じた。グラスがカチンと鳴る。二人の男の喉が鳴った。

「ふーっ、やっぱり久々のビールは美味いね」

功一が口に付いた泡を吹きながら言った。

「父さんなんか、ここのところ雨続きだから仕事がなくてな。昼間から、この美味い麦茶を飲ませてもらってる」
「父さん、もうそろそろ働かなくてもいいんじゃない？」
「年金だけじゃ食えないんだよ。身体が動くうちは働かにゃ」
「父さん、一つ聞いてもいいかい？」
「ん、何だ？」
「どうして俺があの病院、行くの反対しなかったんだい？」
　すると鉄夫は「ふーっ」とため息をついてグラスを置いた。
「本当は行ってもらいたくなかったさ、あんなところに……。でも仕方ない、仕方ないじゃないか」
　そこへ律子がお新香と冷奴を持ってきた。鉄夫が功一のグラスにビールを注ぎ、自分のグラスにも手酌で注ぐ。
「お父さんね、血圧の薬を貰いに行った時、病院の待合の雑誌で、たまたまうつ病の記事を読んだんですって」
　律子が心配そうにエプロンの端を握った。
「ああ、コンピューター関係や公務員でもうつ病が増えているってな。放っておくと、どんどん悪化して、治りも悪いそうじゃないか。だったら精神病院でもどこへでも行って、きっちり治した方がお前のためだと思ってな。でもまさか、入院するとまでは思っていなかったぞ」
「そうか。ご心配をお掛けしました」
　功一は改まり、両親に向かって深々と頭を下げた。
「馬鹿、子どもを心配するのが親の仕事じゃないか。そりゃ、子どもが幾つになっても同じことよ」
　この時、功一はふとこずえの両親のことを思った。正直、今までこずえを厄介払いするために入院させたのだと思っていた。しかし、アダルトビデオに出演し、うつ病になりリストカットまでしたわが娘を守るために入院させたのだとしたら、それは至極当然の考えではないかと。

功一が実家に身を寄せてから一週間が過ぎようとしていた。この間、これと言ってすることもなく、功一はただぼんやりと過ごしていたのである。日中、テレビを観たり、晴れていれば、散歩をし、近くの秦野運動公園や戸川公園でのんびりしたりするのが日課だった。それに秦野も郊外になれば時間の流れは緩やかで、開放的なところが心地よかった。しかしながら、それだけの日課では二十八歳の男が身を持て余すのは当然と言ってよかろう。次第に功一の口からはため息が漏れるようになってきた。

金曜日の夕方、鉄夫が仕事から帰ってきて、功一に言った。

「どうだ、明後日、久々に釣りにでも行かないか？」

「釣り？」

「折角なら、船に乗って行こうじゃないか。金沢八景からカサゴの船が出るんだ」

「カサゴかぁ。骨っぽいけど刺身にしても、煮付けにしても美味いね」

「よし、決まり、決まり。早速、船宿に電話を入れとくわ」

そう言うと鉄夫は作業着の上着から携帯電話を取り出すと、そそくさと弄り始めた。

功一は物置へ行くと、仕舞い込んだ自分の釣竿とリールを引っ張り出してきた。それらは積年の埃に埋もれており、リールなどはオイルとグリスを注さなければ使い物になりそうにない。それでも功一は嬉しかった。鉄夫が釣りに誘ってくれたこと、そして、今こうして釣具を弄る時間が出来たことが。

功一は夕食もそっちのけでリールのメンテナンスに没頭していた。鉄夫は「父さんの道具を貸してやる」と言ってくれたが、やはり自分の道具で釣りたいものだ。リールは単に埃を被っていただけでなく、部分部分によっては錆付きもあり、入念なオイルとグリスの注入が必要だった。

そんな時、功一の携帯電話が鳴った。携帯電話のディスプレー表示を見て功一は驚く。それはこずえからの電話だった。

「もしもし、こずえ？」
「もしもし、退院しちゃった」
「え、こんなに早く？」
功一が目を丸くする。こずえが入院してまだ一ヶ月経っていないだろう。
「ちょっと、患者同士でトラブルがあってね、強制退院させられて今帰ってきたところ。まあ、良かったかも、功一のいない病院なんてつまんないし」
「今、どこにいるの？」
「厚木の実家よ。ねえ、これから会わない？」
「これからかい？」
功一は時計を見る。時計の針は十九時を指そうとしていた。
功一は律子に「ちょっと出掛けてくる」と言い、上着を羽織った。
「ちょっと、功一」という律子の言葉は、彼の耳に届いたかどうかはわからない。漆黒の闇に溶け込む小豆色の軽自動車は、すぐさま滑り出した。

その日の二十時半、小豆色の軽自動車は小田原市内にある、ハートランドクラブハウスというレストランの駐車場に停まっていた。このレストランはウッドデッキがあり、眼下に小田原厚木道路を行き交う車のテールランプを眺め、遥か向こうにはライトアップされた小田原城を望むことができる。
「ごめんね、こんな時間に突然呼び出して」
「ううん、でもビックリしたよ」
「どうしても今夜、功一に会いたかったの」
そんな会話がレストランのテラスで交わされていた。金曜日の夜だというのに、ウッドデッキのテラスにいる客は功一とこずえだけだ。こずえは退院してすぐに化粧を施したのだろう。その美しさが際立っている。服装もまたミニスカートに戻っていた。
「相当、病院で嫌なことがあったな？」

「うん、まあね。私にはあの病院、合わないみたい」
それ以上のことを功一は敢えて聞かなかった。おそらくは女性患者同士の確執がこじれ、トラブルになったのだろうが、こずえが喋らない以上、聞く必要のない話だ。事実、こずえは強制退院させられているのだから、良い気持ちはしないであろうと功一は思う。
「功一にね、どうしても言いたかったことがあるの」
「何だい？」
「正式にね、私と付き合って欲しいの……」
「もちろん。俺もそのつもりさ」
「元ＡＶ女優でもいい？」
「そんなの関係ないよ。好きになった人がタイプだから」
「こんな気持ちになったの初めて。今まで何となく付き合って、別れての繰り返しだったから、新鮮かも」
「俺にとってはこういうのが当たり前なんだよ」
功一が笑った。しかし、その口調は少しも嫌味ではない。こずえが立ち上がり、眼下の小田原厚木道路を眺めた。功一が寄り添う。
「一つだけ注文してもいいかな？」
功一がいささか真剣な表情で言った。
「なあに？」
「そのうち、こずえのご両親に会わせてくれないか？」
「嬉しい。うちの両親に会ってくれるの？」
こずえが功一に抱きついてきた。化粧の香りが功一の鼻をくすぐる。
「今まで付き合った人って、親に合わせられない人ばっかりだったから……」
「俺のことはご両親によく言っておいてくれよ」
「はいはい」
こずえがおどけて敬礼の仕草をする。そして、すぐに腕を功一に絡ませてきた。遠くに浮ぶ小田原城を二人でぼんやりと眺めた。
「ねえ、このまま二人でどこか行こうか？」

こずえが甘えた声色でせがむ。
「ダメ。今日は帰らなきゃ。退院したその日に親を心配させちゃいけないよ。俺の印象も悪くなるだろう？」
「それもそうね。じゃあ、明日の昼間は会える？」
「いいよ」
「でも、もう少しこのまま……」
功一はそっとこずえの肩を抱き寄せた。

功一が実家に戻ったのは二十四時を回ってからだった。心配していた両親は功一の帰りを寝ずに待っていた。功一もこずえと別れた後、実家に連絡は入れておいたが、帰りが遅くなったことを両親に詫びた。
「お前、どういうことだ？」
鉄夫は苛立ちを隠せずに、功一を問い詰めた。
「ごめん。彼女から突然連絡がきて……」
「彼女？」
鉄夫も律子も目を丸くした。
功一は入院中にこずえと知り合ったこと、彼女がアダルトビデオに出演していたこと、そして彼女と真剣に交際を始めようとしていることを両親に率直に話した。
「母さん、酒だ、酒！」
「まあ、また飲むんですか？」
「功一に彼女ができたっていうんだ。めでたいじゃないか」
「でもねぇ。母さんはちょっとアダルトビデオっていうのが引っ掛かるんだけどねぇ」
「いいじゃないか、若い者同士、好きにやらせれば。こいつは今まで女に縁がなかったんだぞ。いや、めでたい、めでたい」
鉄夫は愉快そうに笑いながら、一升瓶を取り出して、湯飲みに注ぎ始めた。そして、それをグイと煽る。つまみなどいらぬ。息子の話がつまみなのだ。

「それにしても入院して彼女を見つけるとは、これこそ正しく怪我の功名だな」
鉄夫は既に二杯目を注いでいる。
「ところで父さん、日曜日の釣り、こずえを誘ってもいいかな？」
「おお、そりゃ構わんが、彼女、気を遣わないか？」
「こずえも釣りに興味があるみたい。以前、ブラックバスを釣ったことがあるんだって。それに父さんや母さんにも会いたいって」
「そうか、そうか」
鉄夫の目はもう眠たそうだ。律子は困ったような顔をしている。功一はこんな家族に支えられてつくづく幸せだと思った。そしてこの時、歯車はすべて順調に噛み合い、世界は功一とこずえを中心に回っているように思えた。
功一は部屋に戻ると、そそくさと携帯電話を弄りだした。

そうは言っても、こずえは緊張していた。釣りの当日、功一が迎えに行った車中でのことである。
「ああ、何だかドキドキする」
「気さくな親父だし、心配する必要はないよ」
「昨夜は眠れなかったのよ」
こずえが眠たそうな目をこずる。こずえとは朝五時に本厚木駅で待ち合わせをしたのだ。
ハンドルを握る功一は半ば安堵していた。昨日のデートで話をしていたとはいえ、こずえがミニスカートで来ないか心配だったのだ。しっかりとパンツ姿で現れた時には、正直ホッとしたのだった。
鉄夫は自分の車で先に船宿へ向かっていた。「若い者は若い者同士で……」などと言っていたが、それでも気を遣っているようだった。
朝の東名高速道路は空いていた。海老名サービスエリアでおにぎりを買うが、こずえは緊張のためか、喉を通らないようだった。功一が「船酔いするから」と言うと、無理にお茶で流し込んだ。小豆

色の軽自動車は保土ヶ谷バイパスを抜け、横浜横須賀道路へと進入し、朝比奈インターチェンジで降りる。テールランプはまばらだった。功一は鉄夫に書いてもらった地図の通りに車を進めた。金沢八景はさすが船宿銀座である。ここかしこと船宿がひしめき合っている。そんな船宿群を横目で眺めながら帰帆橋を渡り、一つ目の信号を左折して「新健丸」という船宿に着いた。

「よう、父さん」

「早かったな」

鉄夫はニヤニヤ笑いながら、竿をケースから取り出していた。功一とこずえは車から降りると、少し改まった面持ちになる。

「父さん、紹介するよ。今、お付き合いしている、野原こずえさん」

「始めまして、野原こずえです」

こずえが深々と頭を下げた。

「いやー、どうも始めまして、功一の父の鉄夫です。今日は済みませんねぇ。息子が釣りなんかに誘っちゃって……。あの、いろいろ教えますんで大漁確実ですよ」

鉄夫は帽子を脱ぎ、人懐っこそうな笑みを浮かべた。その微笑にこずえの肩の力が抜けていくのがわかった。

「今日はよろしくお願いします」

こずえは深々と頭を下げた。

「いい子じゃないか」

鉄夫が功一にそっと耳打ちをした。

「おはようございます。荷物はカートに載せてください」

船宿の若女将が声を掛けた。続いて船長がやってくる。

「今日はどの辺に行きます？」

鉄夫が船長に尋ねた。角刈りだが丸顔の温厚そうな船長だ。

「今日は観音崎沖だね。昼から午後にかけて下げ潮が利くから狙い目だと思いますよ」

船長は道具をカートに載せながら、屈託のない笑顔で答えた。

「父さん、最近はこの船によく乗るのかい？」

功一が鉄夫の顔を覗き込んだ。
「ああ、この新健丸は親切だぞ。馴染みの船でなければ、お前やこずえさんを乗せるわけにいかないからな」
「父さんは最近、金沢八景に来ているの？」
「東名高速を使うと東京湾は案外と近くてな。この歳になると遠征はもうかったるくって……」
鉄夫が照れたように笑った。
「今日はご家族で？」
船長が荷物を積み込みながら、愛想よく笑った。
「ええ、息子とそのコレなんですよ」
鉄夫が小指を立てた。船長は「ははぁ」という顔をし、微笑んでいる。功一もこずえも顔を見合わせた後、船長に一礼をした。船長は「昼過ぎには下げ潮が利くから、いい釣りできるよ」と気さくに声を掛けて船に乗り込み、餌の準備に取り掛かっている。すると、程なくしてエンジンの音が轟く。
実際、「新健丸」は釣り雑誌などにもよく掲載される、人気の船宿だ。春から夏場にかけては主にカサゴを狙い、秋冬にはイシモチを狙わせてくれる。ホームページこそアップされていないが常連で賑わう宿で、初心者にも親切で丁寧なことで知られている。また、ここの船宿特製の仕掛けはちょっとした工夫が施されており、よく釣れるのだ。
「お父さん、一つご指導、よろしくお願いします」
こずえが改まり、鉄夫に頭を下げた。
「いや参ったな、お父さんかぁ。あははは、わかりましたよ、まかせなさい」
鉄夫が豪快に笑ったところで、若女将から声が掛かった。
「そろそろ、船が出ますよ！」
船はゆっくりと桟橋を滑り出した。客は鉄夫と功一、そしてこずえの他に総勢十名程を乗せているだろうか。船長は若女将に「行っ

てくるよ」と元気良く手を振った。その仕草が爽やかだった。客を乗せた船は、八景島シーパラダイスの脇で一旦停泊し、スパンカーと呼ばれる帆を張った。それからフルスロットルで観音崎沖を目指す。金沢八景からは三十分程の船旅だ。

「船って気持ちいい」

こずえが髪を風に預けながら呟いた。そして帽子を被りなおす。こずえはトモと呼ばれる船の船尾に陣取っていた。その前に功一、鉄夫と並ぶ。トモはほとんど揺れないし、波も被らない。レインウェアを着込んでいないこずえには丁度よい席だ。もっとも凪であるから波を被る心配もなかったのだが。

こずえは船が切る風を全身で感じているようだ。時折、深呼吸をする。そして、瞳は遠くの景色を捉えていた。船のエンジンが立てる爆音も、吹き付ける塩辛い風も、そして大海原の懐も、すべてこずえの五感を刺激していた。

「あの近くに見えるのが猿島だよ」

鉄夫が横須賀方面を指差さす。

「へえー。こんな船旅なんて初めて」

こずえは釣り以上に船に揺られることに興味を示しているようだ。

「俺も昔はよく親父に付き合わされて釣りに行ったなぁ」

功一がしみじみと言った。

「こんな楽しみを昔からしていたなんて贅沢よ」

そんな会話をしていると船は減速し、その歩みを止めた。ちょうど観音崎灯台から少し沖へ行った辺りである。

「こずえさん、気持ち悪くはないかい？」

「全然、平気」

こずえが得意そうに言った。功一もこずえも身を乗り出して海底を覗き込むが、さすがに水深があるため海底までは見えない。海は混ざりきらない青と緑を湛えながら、こまめに波を打ち返していた。

「すごい、吸い込まれそう」

こずえが感嘆の声を漏らす。

「この下にお魚さんたちの竜宮場があるのかな？」
「やっぱこずえは女の子だね、ロマンチック」
功一が笑った。その横で鉄夫は針に餌を付けている。餌はサバの切り身だ。
「はい、どうぞ」
船長がそう言うと、まず鉄夫が仕掛けを下ろす。サバの切り身が水中でキラキラと煌くのがわかった。
「いいか、サバの切り身は皮の方から針に刺すんだぞ。それから、仕掛けを落としたら馴染むまで待って、岩と岩の間に落とすようにするんだ。それから……」
功一もこずえも鉄夫の話を聞いていなかった。どうやら船が移動している間に仕掛けが絡んだらしい。解くのに四苦八苦している。それを見兼ねた船長が飛んできて、手際よく仕掛けを解き、丁寧に餌まで付けてくれた。
「今、お父さんが言ったように、岩と岩の間に落とすようにして。チョコチョコ動かしちゃダメだよ。アタリがあったら勝手に食い込んでくれるから。でも待ちすぎちゃダメ。根に潜られちゃうからね」
根とは海中の岩のことで、カサゴは違和感を察知すると岩と岩の間に隠れる習性がある。そうすると、なかなかのことでは根から出てはこないのだ。アタリがあって十分食い込ませてから、根に潜られる前に釣り上げる。そこがカサゴ釣りの妙味なのだ。
功一もこずえも仕掛けを放った。新素材の糸は感度がすこぶる良い。オモリが岩と岩の隙間に入り込むのがわかるくらいだ。それは一種、ザリガニ釣りに相通ずる趣がある。
「何かきてる、きてる」
こずえが叫んだ。見ればこずえの竿先がプルプルと震えている。
「そりゃ、ベラかトラギスだな」
鉄夫がこずえの竿先を眺めながら言った。こずえはリールを巻いた。すると、十五センチ程のパールホワイトの魚が、大きなサバの切り身を咥えていた。

「残念、オハグロベラだったね」
功一が苦笑した。だが、こずえは珍しいものでも見るかのように、パールホワイトの小魚を繁々と眺めている。
「オハグロベラって言うんだ。可愛くて綺麗。水槽で飼ったらいいかも」
功一はオハグロベラを針から外してやった。
「持って帰らないだろう？」
「食べられないの？」
「まず食わないね。子どもの頃、よく親父に連れられて宇佐美の船に乗った時、よくベラとかネンブツダイが釣れてさ。それをカモメの餌にして遊んでいたっけ」
「えーっ、それ可哀想。このオハグロベラは海に返してあげようっと」
こずえがオハグロベラを海に落とした。放ったのではなく、その白い指から滑り落としたという表現が正しい。オハグロベラは元気良く海底へと戻っていった。
「あまり一箇所で粘ってると地球を釣っちゃうぞ」
鉄夫が竿をゆっくり上下に動かしながら言った。
「オモリが底に着いたら、十秒くらい馴染むのを待って、スーッとゆっくり持ち上げるんだ。そして五秒くらい待って、またゆっくり落とす。その繰り返しだ」
鉄夫に言われた通りに、功一もこずえもやってみるが、なかなか魚からの返事はない。船長も「潮が動かないし、澄み過ぎてるよ」とぼやいている始末だ。
それでもこずえは真剣になって、竿を動かし、神経を集中させているようだった。
「こずえさんは釣り人の姿勢をしているなぁ」
鉄夫がこずえの釣る姿を見てしみじみと言った。
「釣り人の姿勢ですか？」
「釣り人っていうのは、知らず知らずのうちに前のめりの姿勢にな

っているもんなんだよ。こずえさんも前のめりになって竿を動かしてるよ」
鉄夫がそう言った時だった。こずえの竿先がゴンゴンと叩かれ、海中に引きずり込まれそうになった。
「うわっ、何かきた！」
「早くリールを巻いて！」
鉄夫が叫ぶ。
「重―い！」
こずえがリールを巻く間にも、竿先はグイグイと水面に引っ張られている。
赤黒い魚体が水面に覗いた。その大きさたるやかなりのものだ。
船長が操舵室から駆け寄り、タモ網を持ってきて、手際よく魚をすくってくれた。赤黒い魚は船の甲板の上に無造作に放られた。
「やったね、カサゴじゃん。それもお刺身サイズ」
功一が自分のことのように嬉しがっている。船長も「いやー、こういうのを釣らせたかった」と笑みをこぼした。
「いやー、トゲトゲ！」
こずえはその大きな魚体と厳つい面持ちに圧倒されているのだろうか。おっかなびっくりで、なかなかカサゴに触れない。何しろ三十センチはあろうかという大物だ。功一はその口から針を外してやった。
「いやー、おめでとう。狙ってもなかなかこれだけの大きな型は釣れるものじゃないよ」
鉄夫が祝辞を述べる。こずえは照れたような笑いを隠しながら、ガッツポーズをしておどけてみせた。こずえはブラックバス釣りの経験がある。恐る恐るだがカサゴの下顎を持って、その魚体を高々と掲げた。それを功一が携帯電話のカメラで写真に撮る。
「これ、携帯電話の待ち受けにするんだ」
功一も照れたように笑った。一度は自信を失くした者たちが、自信を取り戻したような一匹であった。

その後、カサゴの食い気は好転せず、こずえの釣った一匹で船は観音崎沖から猿島沖へと移動することになる。しかし、ここでも状況は好転しなかった。

「船長さんはいい釣りできるって言ったのに、カサゴいなくなっちゃったのかな？」

功一がぼやく。鉄夫とこずえは、ただただ竿を動かし、竿先に神経を集中させている。「いや、カサゴはいるさ。ただ、食い気を起こしてくれないだけさ」

鉄夫がしかめっ面をして言った。

「カサゴって奴は結構臆病な魚でね。潮の流れが気に入らなかったり、危険を察知したりすると岩陰に隠れて出てこないんだ。そんなところも人間そっくりじゃないか」

功一は思った。自分の姿もカサゴに似ていると。そもそも人は誰でも自分を守る自己防衛の本能がある。だが、功一はうつ病になってから、それが顕著になったような気がしてならない。そう、まるで岩陰に隠れるカサゴのように。そして、こずえと出会い潮が流れ出した時、ようやく岩陰から出てきたのである。

断っておくが、うつ病は「気の持ちよう」の問題ではない。立派な脳の病気なのだ。脳の神経伝達物質の異常によって引き起こされる病気である。だから、いくら気をしっかり持とうとしても、脳が正常に機能しなければ改善はされない。

少しすると潮が利きだしたのか、ポツポツではあるが鉄夫がカサゴを釣り始めた。功一の竿にもアタリがあった。ゴゴゴンという無骨なアタリは心地よくもある。功一はカサゴを遠慮なくゴボウ抜きにした。二十センチそこそこのカサゴだが、功一にとって本日初の獲物だ。功一はボウズ（一匹も釣れないこと）を免れたことと、こずえへの面目が立ったことで、内心ホッとしていた。こずえも功一が釣れたことを素直に喜んでくれたのが嬉しかった。

「潮も利き始めたし、観音崎沖に戻ってみましょう」

船長の提案で船は再び観音崎沖に移動する。
するとどうだろう、先ほどまで沈黙していたカサゴたちが嘘のように飛び出し、餌を咥えるではないか。鉄夫にも、功一にも、そしてこずえにもアタリがくる。常に誰かしらの竿が弧を描いている状態が続いた。
「カサゴのアタリって、見た目そのままね」
こずえが笑いながら言った。カサゴは鋭い棘を持ち、面構えは厳つい魚である。漢字では「笠子」と書き、釣り上げられ鰓を張ったカサゴの姿が笠を被った姿に似ていることから由来する。その引きは面構えと同様、無骨なもので知られている。
「確かにゴツゴツした引きだよね」
功一がサバの切り身を針に付けながら同調した。ちょうどこずえは釣り上げたカサゴを針から外そうとしていた。功一からプライヤーを使った針の外し方を教わり、お姫様釣りは卒業したようだ。
「カサゴって厳ついけど、よくみると愛嬌がある顔してるわね」
「美人のこずえに言われちゃ、カサゴも敵わないよな」
それからというもの、船長はこまめに船を流し変え、その度に必ずカサゴが釣れた。
「釣りってやつは、つくづく人生に似ているなぁ」
鉄夫がポツリと呟いた。
「えっ？」
それを小耳に挟んだ功一が、鉄夫の顔を覗き込む。
「さっきみたいに全然釣れない時もあれば、バタバタと釣れる時もある。人生も同じよ。何をやってもダメな時もあれば、急にトントン拍子にうまくいくこともある」
「なるほどね」
功一が頷く。
「奥が深い」
親子の会話にこずえも絡んできた。
「まったくダメな時があるからこそ、人は頑張れるのさ。でなきゃ

努力しないもんな。釣れなきゃ何で釣れないんだろうと必死に考えるだろう。でも焦っても良い結果は生まれない。それも人生と同じよ」

そう語る鉄夫の横顔は夕日に染まりかけていた。

「今日はあまり釣れないんで時間を延長しましたが、後十五分で揚がっていきます」

船長が操舵室から声を掛けた。

「そうだ、こずえさんも今日、夕飯を一緒に食べませんか？」

「え、いいんですか？」

「カサゴの刺身と煮付けで一杯やりましょう」

鉄夫は円満の笑みを湛えている。

「それじゃあ、俺がこずえを車で送れないじゃないか」

どうやら功一は酒を飲むことに抵抗を示しているようだ。

「電車で送ればいいじゃないか」

功一とこずえが顔を見合わせた。二人でクスッと笑う。

「さて、もうちょっとオカズを釣るぞ」

消えない唇の感触

功一とこずえはその日、厚木のぼうさいの丘公園に来ていた。ぼうさいの丘公園は厚木の郊外にある公園で休日などは子供連れなどで賑わう。功一とこずえは子どもたちが浸かって遊ぶ流水に足を浸けながら、涼を取っていた。

あのカサゴ釣り以来、こずえは頻繁に功一の実家にも出入りするようになっていた。

功一は功一で、こずえの実家への挨拶は済ましていた。こずえの実家は厚木の恩名というところにある。このぼうさいの丘公園からも程近い。功一は挨拶に行く際、アダルトビデオに出演した娘を精神病院に入院させたくらいの親と聞いて、一、二発殴られるくらいの覚悟はしていた。だが、意外にもこずえの父、喜久雄は「やっと、まともに家に連れてこられるような男を見つけたか」と言って、快く功一を迎え入れてくれた。それ以来、功一もこずえの実家へは時折顔を出していた。どうやらこずえの両親も功一を信頼してくれているようだった。それは功一が娘と同じ病気を患っていることよりも、どうも公務員であることの信頼が大きかったようだ。公務員であることの辛さを噛み締めていた功一であるが、この時ばかりは自分の立場に感謝した。

八月の厚木の緑は美しく、流水の楚々とした雰囲気と相俟って、何ものにも変えられぬ風情がある。綿飴のような雲が千切れて飛んでいく空はどこまでも抜けており、陽の光が樹々に生命感を与えていた。

そんな麗らかな午後のひとときを、こずえの脚は清らかな水と戯れて遊んでいた。

「こんなところが実家のすぐ側にあるなんて羨ましいな」

「あら、功一のアパートからも近いんじゃないの？」

「まあね。でも来たことなかったよ」

「功一の実家の近くにも運動公園があるじゃない。広くて大きいの」
功一はこずえとこんな会話ができる幸福が有難かった。ただ、刻一刻と復職の時期が近づいている。こずえを心の支えにしようと思うが、ここのところどうも気持ちが前に進まない。復職という現実が重く功一の心に圧し掛かり、その重圧で押しつぶされそうになるのだ。功一はここのところ、眠りが浅くなっているような気がしていた。
「俺さぁ、今月の下旬には職場復帰しなきゃならないんだけど、気が重いんだよね」
功一が青い空を恨めしそうに見上げて唸った。
「復帰が辛いの？」
「でも、ここを越えなければ、何をやってもダメな気がするよ」
功一がため息を漏らす。功一の背中をこずえがポンと叩いた。
「もっと軽くいこうよ、そうライトに。いざとなれば、先生に診断書とか書いてもらって、休暇の延長を頼んでみたら？」
「うーん、その手もあるんだけどなぁ。ますます立場が悪くなりそうで……」
「ふふふ、私なんか捨てるもの無くなっちゃったから、気楽なもんよ。私はね、功一さえいてくれればいいの。他には何もいらない」
「男の職場にはしがらみがいろいろとあるんだよ」
急にこずえが真顔になって、功一に迫った。
「仕事と私のどっちかを選べって言われたらどうする？」
「そりゃあ……、こずえだよ」
功一はやや後ろに仰け反って答えた。するとこずえは「嬉しい」と言って、腕を絡めてきた。

その日は功一の診察日だった。
「ああ、休暇延長の診断書なら書きますよ」
主治医はあっさりと言った。功一にしてみれば、随分と呆気ない言葉だった。主治医は眼鏡を指で押し上げながら、カルテに何か書

いている。
「やっぱり、まだ良くなっていないんでしょうか？」
功一は不安を隠せずに尋ねた。功一は昨夜もほとんど寝られなかったのだ。
「入院した時よりずっと良くなっていると思いますよ。ただ、あなたのうつ病は重度でしたからね。脳の機能が回復には相当な時間がかかると思ってください。まあ、重度のうつ病の方でも日常生活を送れるくらいに回復する方は結構いますよ。ただ、復職のハードルはやっぱり高いですね。いざ、職場に向かっても足が震えて戻ってくるケースも多いです。まあ、焦らないことです。一歩一歩やっていきましょう」
主治医は淡々と、説得するように言った。
「最近、睡眠は？」
「あまり眠れません。眠りが浅くて、朝方によく目が覚めるんです」
「それは良くないですね……」
主治医が渋い顔をした。そして「眠剤を調整」などと独り言を呟いている。
「ところで神崎さんはご趣味を持っていらっしゃるんでしたっけ？」
「はい、趣味というか、最近釣りに行ったんです。面白かったですね」
「ほう、釣り、釣りね。釣りはリハビリにいいですよ」
「そうなんですか？」
「私の受け持つ患者さんで、毎日釣りに行ってうつが良くなった方が何人かいます」
その話には功一も驚きを隠せなかった。
「あのー……、恋愛はどうでしょうか？」
「は？」
「今、お付き合いしている人がいるんですけど、彼女もうつ病で……」
今まで功一は主治医にはこずえと付き合っていることを打ち明け

てはいなかった。恋愛には相応のエネルギーが必要だ。それが果たしてうつ病とどのような関係にあるのか知っておきたかった。
「うーん……。お付き合いを始めたのは最近ですか？」
「はい。退院してからです」
「新しいことはなるべく避けた方がいいんだけどなぁ。それに、相手もうつ病か……。まあ、しょうがないねぇ」
主治医は頭をボリボリと掻きながら、視線を逸らした。
「まあ、野暮なことは言いません。神崎さんも大人なんだし……。兎も角、診断書は書いておきますよ」
主治医はつまらなさそうに、机と向き合った。そんな主治医に功一は誠意を込めた一礼をした。

結局、主治医には診断書を書いてもらい、就前の薬が追加になった。
功一は受診した足で、厚木市内にあるアパートへと向かった。功一のアパートは厚木の旭町というところにある。久々に帰ったアパートでの雨戸を開け、埃を追い払う。掃除をしている時に、バッグから書類が落ちた。職場の回覧文書だ。功一が資源ごみに出すはずだった書類である。その紙切れに押された上司の捺印を見た瞬間、功一の心臓が「ドクン！」と大きく脈打った。そして、乱れた脈は動悸となり、きつく功一の胸を締め上げる。
（く、苦しい……！）
気が付くと、他愛もない広報の回覧文書は掌から滲み出た脂汗で、じっとりと濡れていた。功一は慌ててその書類をバッグに仕舞うと、おもむろに煙草を取り出し、ベランダへ出た。そして、火を点けて大きく煙を吸い込む。
（こりゃ、まだダメだな……）
動悸はまだ収まらなかった。功一は煙草を吸い終えると、グラスに水を並々と注ぎ、セルシンという頓服の安定剤を口に放り込んだ。そして、一気に水で流し込む。功一が頓服薬に頼るのは退院してか

らというもの、これが初めてであった。
頓服薬を飲んだ功一はベッドに身を投げた。心臓の鼓動だけが脳の中枢に響き渡り、反芻する。脂汗は全身から滲み出ており、シャツが身体に張り付くのがわかった。功一の脳裏にカサゴがまた岩陰に潜り込むイメージが重なった。
頓服薬はおよそ三十分でその効果を発揮する。功一はそれまでの間、締め付けられるような動悸と、滴る発汗の不快感に耐えなければならなかった。そして、心の奥底から突き上げてくるような不安感。何かに頼らなければ乗り切れそうにもなかった。
「ああ、こずえ、こずえ……」
功一は無性にこずえが恋しくなった。すぐさま携帯電話を弄った。

その日の夕方、功一とこずえの姿を「おかめ」の一画に見ることができる。「おかめ」は本厚木駅から合同庁舎の方へ向かったところにある老舗のホルモン焼き屋で、ここのホルモン焼きが功一の好みだった。厚木はホルモン、特にシロコロが有名な町でもある。一人暮らしをしていて、時々はここのホルモン焼きを食べに来ていた功一だった。
「ごめんね、急に呼び出したりしちゃってさ」
「ううん、ここでしょ、功一が前に言っていたホルモン焼き屋って？」
「うん。特にシロコロが美味いんだ」
「それより大丈夫？」
こずえが心配そうな顔をして、功一を覗き込む。功一の口元がフッと緩んだ。どうやら頓服薬は効いたようだ。功一の顔色はだいぶ良い。
「ああ、こずえの顔を見たら落ち着いたよ。実は先生に診断書を書いてもらってさ。休暇を延長することにしたんだ。とてもまだ復帰出来そうにないや」
功一がやや自嘲的に笑う。こずえも釣られて苦笑した。

「お待ちどう様。シロコロにカシラ、ハツ、コブクロになります」
そこへ、ホルモンが運ばれてきた。「おかめ」の肉は新鮮で、その色艶を見ているだけでも食欲がそそられる。
「あ、美味しそう。厚木のホルモンって有名だけど、私、まだ食べたことなかったのよ」
早速、功一が七輪に肉を載せる。シロコロから脂が滴り、備長炭に垂れた。
「ホルモンはじっくり焼かないとね」
二人はホッピーで乾杯し、肉が焼き上がるのを待った。こずえにとってホッピーも初めてだった。
「ホッピーってビールのような、それでいて違うような不思議な味ね」
「ホッピー自体にはアルコールが入っていないから、焼酎で割るんだよ。まあ、ノンアルコールビールを焼酎で割っているようなものだね」
こずえは「ふーん」と頷きながら、ホッピーをチビチビ舐めている。功一はグイと煽った。
「でもさ、功一の休暇が延長されて良かったかも。一緒にいられる時間が増えたもんね」
こずえが焼き上がったシロコロを愛しそうに摘んで言った。
「俺、これでも悩んだんだよ。今までは療養休暇、延長すると休職になるんだ」
「ふーん。どこが違うの？」
「給料とか人事面とかね。それに正直言って出世のことも考えたな。ドロップアウトするんじゃないかと思ってね。でもね、俺にはこずえがいる。それだけで幸せだと思ってさ」
「嬉しい……」
ホッピーをチビッと舐めていたこずえがニンマリと笑った。
「ねえ、今度またカサゴ釣りに行こうよ。あの新健丸」
「それだよ。先生の話では釣りがうつ病に効くらしい」

「へえ、そうなんだ。でも何となくわかる気がするな」
「親父の話では新健丸はもうこの時期、カサゴの乗合船を出していないらしい。今、行くとするとイシモチかな。今年はだいぶ早くイシモチに切り替わったらしいよ。イシモチも面白いけど、こずえはカサゴがいい？」
「そうね。毎回船に乗っていたんじゃお金が掛かるしね。じゃあ、この近くの港でカサゴは釣れないの？」
こずえが肉をひっくり返しながら、素朴な疑問をぶつけてきた。
「多分、大磯港とかで釣れるんじゃないかな。まあ、食べられるサイズが釣れる保証はないけどね」
「いいじゃん。どうせリハビリなんだから」
こずえが焼けたシロコロを頬張った。その口元が何とも言えないエロスを湛えていた。
功一はこずえと付き合い、こずえを既に抱いていた。こずえを抱く時、アダルトビデオを意識などしない功一である。ごくありふれた普通の交わりを行うだけだ。
功一は恐る恐る箸をコブクロに伸ばす。それは豚の子宮なのだが、まるでこずえの子宮を食すような錯覚に陥った。
（愛する人を食べてしまいたい……）
そんな欲求が人間の本能の奥底には眠っているのかもしれないと思う功一だった。以前、外国で恋人を殺害し、食べてしまった青年がいたことを思い出した。その事件こそは嫌悪すべきことであるが、その青年の心境の一端は理解できると思ったのである。
コブクロは功一の口の中で、エロティックな弾力をもって応えてくれた。
「美味しい……」
こずえが笑みをこぼす。
「ああ、美味しいね……」
功一の実家には水槽がある。その水槽の中に十センチ程のカサゴ

が泳いでいた。先日、功一とこずえで大磯港へ行き、釣ってきたカサゴだ。獲物がそれ一匹だけだったため、功一は水槽で飼うことにしたのだ。餌は釣具店で買ってきた、アオイソメという虫を与える。水槽の中に岩陰を作ってやると、カサゴはそこに隠れ、餌を食べる時にだけ、そこから出てくる。口いっぱいにアオイソメを頬張る姿が、何とも愛嬌があり、可愛らしくもあった。

功一は既に休職期間に入っていた。職場には診断書を送付し、休職の辞令が出ていた。直属の上司とは電話で一回、やり取りをしただけで済んだ。今は先日までの葛藤が嘘のように、心穏やかだ。取り敢えずは復職という現実から逃げているのかもしれない。しかし、今の功一にとって、休職期間は岩陰に隠れるカサゴのようなものであり、身を守るために必要な時間だった。

功一はカサゴを眺め続けた。カサゴは大きな口を一杯に開けて、アオイソメを頬張っている。一度では全部呑みきれず、口からアオイソメの尻尾が覗いていた。

（そういえば、こずえからメールの返信が来ないな……）

今朝、功一はこずえにメールをしたが、未だに返信がない。これほど返信がなかったことは今までなかった。メールを打てば必ず直ぐに返信がきた。それに、携帯電話に電話をしても出ないのだ。

功一は携帯電話を弄った。こずえの携帯電話に掛けるが、やはり繋がらない。仕方なく、こずえの実家に掛けることにした。

「もしもし、野原ですけど」

電話に出たのはこずえの母、昌子だった。

「すみません、神崎です。こずえさん、いらっしゃいますか？」

「あら、あなたと一緒じゃなかったの？」

「ええ、すみません。じゃあ、また携帯電話の方へ掛けてみます」

功一の心の中に焦りのような不安が過ぎった。これほどこずえと連絡が取れなかったことは初めてだった。だが、こずえは今どこにいるのかわからない。功一は車のキーを掴んだものの、どうしたものかと家の中をウロウロと歩き回り、まるで動物園の熊のようにな

ってしまった。
そんな功一の様子を見て、母の律子が言った。
「何やっているのよ。落ち着かないわね」
「こずえと連絡が取れないんだ」
功一が爪を噛む。
「あのねぇ、こずえさんは功一の所有物じゃないのよ。少しくらい連絡が取れないからって……。深刻に考えすぎよ。病気に良くないわよ」
律子のその言葉に、功一は自分の水槽の前へと戻った。カサゴはもう、アオイソメを全部食べきっており、また岩陰に身を潜めていた。
功一は母の言葉を受けて、自分とこずえとの関係について考え直していた。改めて考えてみると、功一は随分とこずえに依存していたと思う。仕事を休んでいる今、まるで自分の存在意義そのものであるかのような、依存の程度であった。
（こずえは俺に依存しているのだろうか？）
ふと、そんな疑問が功一の中に生まれた。いつも明るく、功一を支えてくれるこずえは、自分に依存しているような状態だとは思えなかったのである。そう考えると、少しの間連絡が取れなくても、こずえにとっては大きな問題ではないのかもしれないと功一は思い、自分を納得させることにした。
その日の晩は携帯電話を枕元から少し離した場所に置き床に就いたものの、なかなか寝付けなかった。灰皿は山のようになっていた。
二十三時に携帯電話が鳴った。ディスプレーを見るとこずえからの着信だった。
「もしもし、こずえ？」
だが、返ってきた声は野暮ったい男の声だった。
「神崎功一っていうのはお前か？」
「誰だ、あんた？」
その男の声に聞き覚えはなかった。功一の身体は半ば眠剤に支配

されつつあったが、この時ばかりは頭の中が明瞭になっていくのがわかった。同時に心臓の鼓動が高鳴る。
「俺はこずえの彼氏だよ」
電話口の向こうで「嘘よーっ！」と叫ぶこずえの声が聞こえた。
功一は直感的にこずえが以前に付き合っていた男であることを理解した。
「馬鹿な。こずえと今、付き合っているのは俺だぜ」
「くくく、俺とこずえは深い仲で結ばれているのよ。お前が入り込む余地なんてないぜ」
男は勝ち誇ったように笑った。功一は身体中の血液がすべて頭に上っていくのがわかった。
「それにこれ以上、こずえと関わると怪我するぜ」
こずえの「やめてーっ！」という声が聞こえた。
「やれるもんなら、やってみな。それより早くこずえを開放してやれ。嫌がっているじゃないか」
「今日は久々にいい声色を聞かせてもらったぜ。これから毎日、お楽しみだぁ！」
男は高笑いすると、一方的に電話を切った。功一の胸の中にどす黒い殺気と灼熱の嫉妬の念が対流していた。眠剤の効果は既になくなっていた。

次に功一の携帯電話が鳴ったのは二十六時過ぎだった。無論、相手はこずえだった。
「ごめんね、こんな時間に……。さっきはごめんなさい」
「いいよ、ずっと連絡を待っていたんだ。一体どういうことなんだ？」
功一は責めるふうでもなく、なるべく落ち着いて喋るよう心掛けたつもりだった。ここでこずえを責めても仕方のないことは分かりきったことだった。
「ごめんね、功一の声を聞きたかったの。ごめんね」

「あの男、誰なんだよ？」
「元カレ。別れたはずなんだけど、よりを戻そうって言って、強引に……」
「なんで会ったんだよ？」
つい功一は語気を強めてしまった。すると、携帯電話の向こうの空気がすすり泣いていた。
「もう、あいつの誘いには乗るなよ」
こずえは「うん」と気のない返事を返し、ただ「ごめんね」と繰り返す。
「はぁーっ……」
功一は深いため息を漏らした。
「今日は遅いから、明日また話そう。明日会おうよ」
「うん……」
こずえは力なく答えた。その声にはまるで生気がない。功一はこずえの身に、何かよほどのことが起こったのだろうと推測する。だが、こずえは語ろうとはしない。
「じゃあ、お昼前に迎えに行くね」
「ありがとう……」
「おやすみ」
「ええ、おやすみなさい」
こずえの声は震えていた。いつも、功一が落ち込んでいる時には明るく励ましてくれるこずえだが、今日は「ごめんね」しか言わなかった。功一はやるせない仕草で電話を切った。こずえと連絡が取れたことは良かったが、どうも態度が気に掛かる。まるで魚の骨を喉に引っ掛けたような気持ちだ。
（俺はそんなに頼りないかなぁ……）
そんなことを心で呟きながら、功一は煙草を取り出すと、おもむろに火を点けた。フーッと重いため息を吐き、既に山のようになった灰皿に、トンと灰を落とす。功一は半分も吸わないうちに、煙草をもみ消した。そして、横になる。

眠剤の影響で身体だけが異様にだるい。功一の瞳は虚ろだった。だが、眠れるわけではなかった。

功一の携帯電話の着信音が鳴ったのは翌朝だった。身体は夕べの眠剤に支配されていた。眠りに落ちた後、急に効果を発揮したのだろう。異様に身体がだるかった。それでも腕を伸ばして携帯電話を握る。

「もしもし？」

「神崎君かね？」

功一はその声に聞き覚えがあった。こずえの父の喜久雄だ。喜久雄の声は慌て、上ずっていた。

「大変だ、娘が、娘が……！」

「こずえさんが、どうしたんです？」

「手首を切って自殺しようとしたんだ！」

「自殺ですって？」

功一の脳天に鋭い電気信号が一瞬のうちに駆け巡った。体内に残っていた眠剤が一気に抜け、脳の回路がけたたましく働き出すのがわかった。

「で、助かったんですか？」

「ああ、一命は取り留めたが、まだ意識が回復していない。気付いた時には、風呂場で……。もうちょっとで、手遅れになるところだった……」

「そ、そんな……」

功一の胸が急に苦しくなり、真っ赤な焼けた鉄を投げ入れられたような痛みが走る。同時に、目にこみ上げてくる熱い涙。

功一は昨日の電話の男の存在が、こずえの自殺の動機だと直感した。功一はこずえのために微塵の力にもなれなかった自分を恥じ、責めようとしていた。

「医者が言っていた。うつ病は回復する時期に自殺する危険があると……。娘の携帯電話を見たら、昨日、昔の男から電話やメールが

入っていたんだ。とんでもない男だったんだ」
喜久雄が電話越しに泣いていた。唇を噛んでいるのがわかった。
功一はハッとした。昨夜のこずえの電話は別れを言うための電話だったのだ。
功一も以前、主治医から聞いたことがある。うつ病は急性期には自殺するエネルギーがなく、回復期に自殺願望が残存していると、自殺するエネルギーがうつの状態を上回り、衝動的に自殺してしまうことがあるのだ。こずえの場合も昔の男に無理な要求を突きつけられでもしたのだろうか、将来を悲観し、衝動的に手首を切ったのだろうと功一は推測した。
「どうして僕に、僕に相談してくれなかったんだ！」
「君も娘の恋人だろう。何でしっかり支えてくれなかったんだ？」
喜久雄のその言葉は、功一の心臓にそのまま鋭い槍となって突き刺さった。功一の呵責の念は頂点へと達しようとしていた。
「兎も角、娘は今、厚木市立病院に緊急入院しているんだ。できれば君も娘の側に付き添ってやって欲しい」
「わかりました……」
電話を切った功一は、携帯電話を耳に当てたまま、しばらく呆けていた。涙は自然と、止め処もなく流れ出してくる。功一の身体の中にこれだけの水分がよくあるものだと思う。功一は涙を流れるままにまかせていた。ただ、こずえの付き添いを許可してくれた喜久雄には感謝しなければならなかった。
功一が着替え、車のキーを掴んだのは、どのくらい経ってからだろうか。功一はこずえの元へ行かねばならなかった。
霞んだ目に水槽が映った。カサゴのいる水槽だ。それを見て功一は「あっ」と叫んだ。カサゴは口いっぱいにアオイソメを頬張り、頓死寸前でもがいていたのである。
「馬鹿な奴だな……」
功一はカサゴを掴むと、その口からアオイソメを引き抜いた。すると、カサゴは逃げるようにして、岩陰に隠れた。

功一はすぐさま厚木市立病院へと飛んだ。国道２４６号線の渋滞がじりじりともどかしく感じられた。
病室には喜久雄も昌子も来ていた。
こずえは左手首に頑丈なコルセットと包帯を巻かれ、横たわっていた。腕には輸血のチューブの黒味がかった赤が突き刺さっている。
「こずえ、こずえ……」
しかし、こずえは深い眠りに落ちているのだろうか。功一の声に反応しない。
功一は安らかに呼吸を繰り返すこずえの口元を見て、少し安堵感を覚えた。
（助かってよかった……）
よく見ると、こずえの目の脇には涙の乾いた跡がある。それを見て心が締め付けられる功一であった。
「うーん、功一……」
こずえがうわ言を呟いた。そして、薄っすらと瞳を開ける。
「こずえ！」
一同が叫んだ。
「ああっ、私、生きてるの？」
こずえがまだ紫色の唇を振るわせた。
「生きてる。生きてるとも！」
喜久雄がこずえの手をしっかりと握った。昌子も功一もこずえを覗き込む。
「功一、私……」
「何も言うな、こずえ……。話すことがすべてじゃない……」
乱れたこずえの髪を功一は、そっと撫でてやる。髪はさらさらとしていた。それは生気に満ちた質感だった。確かにこずえは生きていた。
「患者さんの意識が戻りました」
看護師のその声で、医師が駆けつけてきた。

「よかったですね。じゃあ、手筈どおり転院になりますので……」
「転院？」
医師のその言葉に功一は目を丸くした。
「精神病院だよ。前のリストカットは傷も浅く、問題なかったが、今度はまた自殺の恐れがあるのでね。警察や保健所も介入して措置入院が決まったんだ」
そう語る喜久雄の表情は強張っていた。
「措置入院……」
その言葉が功一の背中に重く圧し掛かっていた。

こずえは厚木市郊外にある精神病院に転院となった。精神保健福祉法第二十四条による措置入院である。無論、閉鎖病棟で、当面の間は保護室に入れられることになった。基本的に面会謝絶で、外部の刺激はシャットアウトされていた。功一は喜久雄が主治医との面接で得た情報に頼るしかなかった。届きそうで届かないところにこずえがいる。そんなもどかしさを功一は感じていた。
その日の午後も功一はこずえの様子を聞きに、こずえの実家を訪ねた。すると、家の前で二人の男が小競り合いをしてるではないか。
「沢木、いい加減に帰れ。こずえはここには居ないんだ！」
喜久雄の罵声が飛んだ。沢木と呼ばれた男はアロハシャツにサングラスという、堅気とは思えない出で立ちでガムを噛んでいた。
「おら、こずえの奴を出せよ。居るのはわかってんだよ！」
「ここはお前の来る場所じゃない。娘はお前に殺されかけたんだ！」
喜久雄が沢木の胸倉を掴んだ。だが沢木はそれを軽く払いのけると、悪態をつくように吠えた。
「うっせーな、じじい。俺は何もしちゃいねえよ。それとも何か、俺が何かしたっていう証拠でもあんのかよ！」
功一にはその声と態度でわかった。沢木と呼ばれるアロハシャツの男が、あの夜、電話で功一に「俺はこずえの彼氏だよ」と嘯いた輩であることが。

吠える沢木の横へ、一部始終を見ていた功一が歩み寄った。そして、ボソッと囁く。
「こずえは俺の女だ。お前はとっとと帰ってビデオでも観てろ。このクズ野郎……」
すると次の瞬間、沢木は真っ赤な顔をして怒り狂いだし、「この野郎！」と喚きながら、功一に殴りかかった。二発、三発とパンチが顔面にヒットすると、功一はよろけて倒れた。
「よさないか！」
喜久雄が止めるのも聞かず、沢木は倒れ込んだ功一を蹴り飛ばし始めた。ドカッ、ドカッと鈍い音がする。
功一は不思議と痛みをそれほど感じなかった。いや、以前にも似た痛みを感じたことがある。精神病院に入院していた頃、こずえを庇って初老の患者に肘鉄を食らわされた時だ。
（こずえが腕を切った時は、もっと痛かったはずだ）
そんなことを功一は思ったりもした。その最中にも沢木は功一を蹴り続ける。
沢木が倒れた功一の胸倉を掴み、揺すり起こした。
「おら、まだ言うか？」
「ウジムシ、社会のゴミ」
また功一がボソッと呟いた。すると、沢木の瞳は爬虫類のような冷徹な瞳になり、懐から一本のナイフを取り出した。それは午後の太陽の光を反射して妖しく光っていた。
「きゃーっ！」
様子を見に出てきた昌子の悲鳴が響いたその時だった。
「これで勘弁してもらえませんかねぇ……」
何と功一が小声で囁き、財布を沢木に差し出したのである。沢木は功一を一瞥すると、ナイフを収めることなく、財布を掻っ攫った。そして、中身を確認する。
「ふん、シケてやがんな」
沢木はナイフを懐に仕舞うと、もう一度功一の顔面を殴り、踵を

返した。
そこへパトカーのサイレンの音が鳴り響いた。パトカーから警官が素早く駆け下りてくる。昌子が１１０番通報をしたのだ。
「その男です。その男が僕に暴行して強盗したんです！」
功一が沢木を指差した。すると、たちまち沢木は警官に囲まれた。
「テメエ、ハメやがったな！」
沢木が吠えた。だが、沢木は両腕を掴まれ、パトカーの方へ連行されていった。
功一が脇腹を押さえた。あばらの二、三本は折れているだろうと功一は思った。
「あなたも病院に行って診断書をもらってください。そうしたら署の方でお話を窺いたいと思いますので」
若い刑事が功一に歩み寄った。功一は口元に薄っすらと微笑みを浮かべた。

功一は実家での生活を続けていたが、たまに厚木のアパートへ換気をしに帰ったりもしていた。沢木に襲われた傷がまだ痛むこともあった。肋骨はやはり二本、折れていた。結局、沢木は強盗傷害の現行犯で逮捕され、現在も厚木警察署に身柄を拘束されている。沢木はどうやら初犯ではないようで、刑事が「実刑間違いなし」と言っていた。功一も警察で事情を聴かれた時、「恐怖に駆られて財布を出した」「命の危険を感じた」などと言い、沢木の有利になる発言は一切しなかった。警察の調べでは、やはり沢木はこずえに復縁を迫っていたらしい。
喜久雄の話では沢木はこずえの昔の男で、アダルトビデオの仕事で知り合い、秦野の精神病院に入院する直前まで付き合っていたらしい。喜久雄は沢木のことを「チンピラ」と吐き捨てるように言った。
喜久雄は功一のあの時の身体を張った敵討ちには感謝をしているようだったが、自分の両親からはこっぴどく叱られた。だが、功一の

心の中には沢木を逮捕に結びつけたことで、幾ばくかの満足感が残っていた。それと相反するように、こずえに会えない虚しさが胸の中で反芻する。うつ病も実感として良くなっているのかは、功一にもわからなかった。復職してもしばらくは実家から通うことも考えている功一であったが、それはまだ遠い先のことのように思われた。

（たまには気分転換に映画のＤＶＤでも観るかな……）

功一は今日の昼間は換気のついでにアパートでＤＶＤ鑑賞をすることを決めた。功一は車のキーをポケットに無造作に突っ込むと、アパートを後にした。小豆色の軽自動車は少し離れた国道沿いのレンタルビデオ店へ向かって走り出した。

大きな駐車場に車を停めて、功一は何気なく店に入った。

その日、ほとんど無視することの多い、アダルトビデオのコーナーが功一の目に入った。無論、アダルトビデオなど観る気にはなれない功一であったが、こずえがアダルトビデオに出演していたことを思うと、そのコーナーに入らずにはいられなかった。

（こずえがいるかもしれない！）

そう思うと、功一の胸は期待と不安で高鳴った。決して、こずえと見知らぬ男優の情事を観たいと思ったわけではなかった。こずえはアダルトビデオの仕事にプライドを持っていた。だから、ＤＶＤの中だけでもいいからこずえの存在意義を確認したかったのだ。

作業は困難を極めた。アダルトコーナーに陳列されているＤＶＤのパッケージを端から端まで、丹念に、じっくりと見極めていく。化粧とはさすが「化ける」と書くだけのことはある。大体の女性が美しい顔を作り上げ、「化け」ている。そして一様に物欲しそうな瞳を湛えているのだ。だからと言って、自分の恋人を見紛う程、功一は落ちぶれていない。しかしながら、功一はこずえの源氏名さえ知らなかった。

功一は思った。のそのそと巣穴から抜け出し、レンタルビデオ店のアダルトコーナーで物色している自分は、岩陰から出てきて餌を漁るカサゴのようだと。アダルトビデオのパッケージを確認しなが

ら、功一はこずえと釣った新健丸のカサゴを思い出していた。
　功一はすべての棚を確認した。しかし、こずえのＤＶＤはついに見つからなかった。功一は自分の行っていた行動の可笑しさに、つい苦笑を漏らした。功一が携帯電話を弄った。待ち受け画面にはカサゴを高々と掲げるこずえがいる。功一は思わず目を細めた。
　功一が諦めてアダルトコーナーを出ようとした時、無造作に積み上げられているＤＶＤの山を見つけた。アダルトビデオの世界は流行り廃りが早い。レンタル品としては価値のなくなったＤＶＤを廉価で販売しているのだ。功一はそのＤＶＤの山を掻き分けた。
　すると、ＤＶＤの山に埋もれたこずえは美しい化粧を施し、功一に微笑を投げかけながらそこにいた。
「こずえ！」
　功一には時間が止まったように感じた。ただ、ただ、立ち尽くしながら、そのパッケージで微笑むこずえを眺め続けた。
　もう随分と古いＤＶＤなのだろうか、パッケージの写真は色褪せていた。こずえとの再会もつかの間、「１０００円」と貼られた下品なピンク色のラベルに、功一はこずえが値踏みをされたような印象を受け、やり場のない怒りを覚えた。
「僕が……、助けてあげるよ」
　功一はそう呟くと、こずえのＤＶＤをレジへと運んだ。
　功一がそのＤＶＤを観るかどうかはわからない。この時、功一は精神病院で交わしたこずえとの接吻を思い出していた。その唇の感触だけが、功一の脳裏に焼きついていた。
　この時、ゆっくりではあるが、確実に時間は流れていた。功一とこずえはまだ、出口の見えない長いトンネルの中にいた。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4395j/

カサゴ

2010年10月8日15時08分発行